

下田城(鵜嶋城)(市指定史跡)(下田市 3)(下田公園)

下田城(しもだじょう)は静岡県に存在した日本の城(海城)。

立地・構造

現在の静岡県下田市の、下田港の湾口を扼する西側の岬全体が城地だった。直径 800m の円内に複数の入江が点在する天然の地形を利用し、曲輪が配置されていた。本丸は東西 12m・南北 30m の平場で、本丸の北側に 2 段の天守曲輪があった。最南端のお茶ヶ崎に物見櫓があり、直下の和歌の浦が船溜りとされた。

歴史

後北条氏は当城を小田原水軍の根拠地とし、玉縄衆の朝比奈孫太郎が入っていた。やがて豊臣秀吉との関係が悪化すると伊豆衆の清水康英を城将とした。天正 18 年(1590 年)に豊臣側の加藤嘉明らの率いる淡路水軍が来襲し、康英は手兵 600 余で約 50 日にわたって籠城した後に開城している。北条氏の滅亡後は徳川家康の家臣・戸田忠次が下田 5,000 石を治め、当城主となった。忠次の子・尊次は慶長 6 年(1601 年)に三河国の田原城へ転封となり、以後は江戸幕府の直轄領として下田町奉行が支配し、廃城となった。城址は下田公園となっている。

Wikipedia による

下田城址

天下統一を進める豊臣秀吉と、小田原を本拠地とする北条氏の対立が表面化してきた天正 16 年(1588)、陸の防衛拠点である箱根の山中城(三島市)とともに、海の防衛拠点として下田城が取り立てられ、伊豆郡代清水上野介康秀を城将に大改築が行われた。

城は、海と断崖に囲まれた天然の要害に築かれている。通称天守台跡と呼ばれている高台を中心に、四方にのびた尾根の要所に守備陣地である曲輪や櫓台が設けられ、総延長 700 メートルを越える空堀が巡る伊豆半島最大規模の山城である。

天正 17 年(1587)12 月から翌年にかけて雲見の高橋氏や妻良の村田氏など南伊豆の武士が入城し、小田原からは援将江戸摂津守・検使高橋郷左衛門尉が派遣され、臨戦態勢が整えられていった。

天正 18 年 3 月、清水湊(江尻)に集結した豊臣方水軍は、長宗我部元親や脇坂安治らが率いる一万人を越える大船団で、西伊豆を制圧しながら下田城に迫った。圧倒的な兵力を眼前に、城将清水康秀ら 600 余名の籠城軍は、50 日ほど防戦に努めたが、4 月下旬には開城の勧告を受け入れ、城を出た。

下田市教育委員会(平成 21 年 3 月)

